

研究計画書

〔大学院 通信教育課程〕

氏名		専攻分野		指導教員	
----	--	------	--	------	--

※指導教員と面談のうえ合意のもと、作成してください。

I 研究課題

II 研究課題に関する背景

(何故、上記の研究課題に取り組みたいのか、その背景について簡潔に記載してください。)

III 研究目的

(何をどこまで明らかにしようとしているか、研究の特色・独創的な点は何かについて簡潔に記載してください。)

IV 研究方法（概略）

(対象、研究のデザイン、評価方法など。臨床研究は、ヘルシンキ宣言に準拠すること。)

V 期待される研究成果

(どのような研究成果が期待されるか。研究の成果はどんな意義があるか等について簡潔に記載してください。)

研究計画書

[大学院 通信教育課程]

氏名	明治 太郎	専攻分野	伝統鍼灸学	指導教員	斉藤 宗則 准教授
----	-------	------	-------	------	-----------

I 研究課題

「経絡学説における絡脈の臨床的意義に関する文献学的研究」

II 研究課題に関する背景

(何故、上記の研究課題に取り組みたいのか、その背景について簡潔に記載してください。)

経絡の科学的研究は、遅々として進んでいない。その実体を解明することは、さらにヒトの研究が進まなければ困難であると思われる。しかし、実地臨床の中では、臨床効果を神経理論でもって説明するには困難な現象をしばしば経験する。そうした不可思議な現象の説明には経絡学説は極めて有用である。そうしたことから経絡の臨床的意義に関する文献学的研究を進めることは、経絡の科学的研究を促進する上においても意義がある。しかしながら、経脈についての研究はある程度進んでいるものの、絡脈の臨床的意義に関する文献学的研究についてはほとんど行われていない。

III 研究目的

(何をどこまで明らかにしようとしているか、研究の特色・独創的な点は何かについて簡潔に記載してください。)

【目的】鍼灸医学において、経絡は診断および治療の両面で切り離すことが出来ない重要な概念である。しかし、経脈病証や経筋病証については、近年種々の研究報告が行われる様になってきたが、絡脈については、不明な点が多い。そこで、国内外および古典文献に占める絡脈の臨床的意義について明らかにすることを目的とする。

【独創性】これまで絡脈の病証、診断から治療における意義について明らかにした研究はほとんど見当たらない。一方、絡脈の病証は臓腑病と経脈病証との狭間で曖昧に扱われてきた傾向がある。本研究では、その部分に焦点を当てて、明らかにするものである。

IV 研究方法（概略）

(対象、研究のデザイン、評価方法など。臨床研究は、ヘルシンキ宣言に準拠すること。)

【対象】書籍、論文などの文献

【方法】

- (1) 文献研究が中心である。
- (2) 我が国における鍼灸臨床関連図書の中で、絡脈に関する記述を可能な限り網羅し、その意義と出典を明らかにする。
- (3) ついで、中医学等の海外の書籍、論文へと調査対象を広げ、絡脈に関する記述を調査するとともに、出典を明らかにし、古典文献の記述と照合しつつ、その意義について考察する

- (4) 調査し得た内容から、絡脈の診断的意義と治療的運用について検討し、「絡脈病証」として定義づけるとともに、臓腑病、経脈病、経筋病との違いや特徴について明らかにする。
- (5) 可能であれば、附属鍼灸センター等における臨床症例から、絡脈病証に関する診断と治療への応用を模索する。

V 期待される研究成果

(どのような研究成果が期待されるか。研究の成果はどんな意義があるか等について簡潔に記載してください。)

- (1) 絡脈の病証という新たな経絡概念について明らかにすることが出来る。
- (2) 絡脈の診断と治療法を明らかにすることが出来る。
- (3) 従来の臨床にさらに有効な治療法を付加しうる可能性がある。
- (4) これまで不十分であった経絡概念を補足することが可能となる。

研究計画書

〔大学院 通信教育課程〕

氏名	明治 一郎	専攻分野	ヘルスサイエンス 鍼灸学	指導教員	廣 正基 教授
----	-------	------	-----------------	------	---------

I 研究課題

「主観的健康感と東洋医学的な健康評価及び他の評価との関連性に関する調査研究」

II 研究課題に関する背景

(何故、上記の研究課題に取り組みたいのか、その背景について簡潔に記載してください。)

近年、健康度を評価する場合、客観的な指標だけではなく、主観的な健康感が重視されている。一方、東洋医学の問診項目による健康評価は、いわゆる健康成人においては体質評価として利用されてきた。しかし、東洋医学の問診項目も全体的に心身の健康度を評価する指標になるものと考えられるが、そうしたことに関する研究は少ない。その点を他の評価指標と総合的に検討し、明らかにすることは、健康プログラムの開発にも有用であることからヘルスサイエンスの分野では価値があるものとする。

III 研究目的

(何をどこまで明らかにしようとしているか、研究の特色・独創的な点は何かについて簡潔に記載してください。)

【目的】東洋医学の問診項目は、心身全体の健康レベルを総合的に把握するのに適しているか否かを主観的健康感と他の健康指標とを総合的に解析することによって明らかにする。

【独創性】東洋医学の問診項目は、単に病証を判定するためのものではなく、健康レベルを評価することにおいても有用であることを明らかにする点にある。有用であるとすれば、健康プログラムの開発にも繋がる。

IV 研究方法（概略）

(対象、研究のデザイン、評価方法など。臨床研究は、ヘルシンキ宣言に準拠すること。)

【対象】成人男女 500 名程度

【方法】

(1) 調査は、下記の評価を行う。

①主観的健康感の評価

VAS により評価

②東洋医学的問診票

東洋医学の健康調査票 (OHQ57, MOS)

③自己評価疲労スケール (疲労度)

④GHQ-12(ストレス度),

(2) 解析方法

解析は、単純集計、クロス集計、多変量解析(重回帰分析、因子分析など)

V 期待される研究成果

(どのような研究成果が期待されるか。研究の成果はどんな意義があるか等について簡潔に記載してください。)

- (1) 東洋医学的な問診項目が、健康評価指標として使用できる。
- (2) 健康評価の分野において、新しい評価票として使用できるとともに個人に適した健康プログラムを作成する上でも有用となる。